

ハウプトマンとマンの関係を探る

鈴木将史

ゲルハルト・ハウプトマンとトーマス・マン。この二人のドイツ人作家が、一方は戯曲において、他方は小説において、近・現代ドイツを代表する文学者であることに異論を差し挟むものはいない。これだけの「国民的」作家同志となると、その間に公的な関係が生じるのは必然であるが、それ以外の私的な交流もハウプトマン 40 歳、マン 28 歳である 1903 年から存在していた。特にマンが 1929 年にノーベル文学賞を受賞した際には、17 年前に同賞を授与されていたハウプトマンの口添えが大きく物を言ったとされていることから、両者の密接な関係が推察されよう。ところが、両作家それぞれに関しては、夥しい数のモノグラフィーが出版されているにも拘らず、二人の関係について取り上げた考察は、僅かに S.D. Stirk¹⁾ と、H.v. Brescius²⁾、及び H.-D. Tschörtner の論文³⁾ が見当たるに過ぎない。しかも、これらの論文とて、(Brescius はやや広範に論じているものの) ハウプトマン並びにマン研究者のみならず、現代ドイツ文学界においても非常に有名な、所謂「ペーペルコルン・スキャンダル」(マンの長編小説『魔の山』の第7章に登場し、最後には自殺を遂げるオランダ人金満実業家ペーター・ペーペルコルンのモデルが、他ならぬハウプトマンであるという噂が広まり、マンがハウプトマンについては謝罪するに至った文学事件)に焦点を絞ったものである。従って、両者の関係や両文学の比較を包括的に行った研究は、未だもって存在しないというのが現状なのである。これは如何なる理由からなのだろうか。

その理由としてまず挙げたいのが、二人は本当の意味で「友人」ではなかったという点である。「ハウプトマンは友人というのではなかった」と、マンの長男クラウスはその回想録の中で述べているが⁴⁾、ハウプトマン、マン共に、時代による若干の変化はあるものの、相手に対してつかず離れずといったデリケートな距離を保ち続けた。両作家共に文壇で様々な交遊関係を築き上げたが、二人の共通の友人というと、彼等の初期作品群を一手に出版した出版業者 S. フィッシャーは脇に置くとして、その他には、H. ライジガーとか H. オイレンベルクとか M. ハイマンといった作家の名が挙がる程度のものだろうか。1933 年以降マンが母国を去ることもあって、両作家の交遊範囲の人的接点は、上の例にも見る通り、驚くほど少ない。この原因は、どちらかというところ、ハウプトマンに求めるべきであろう。功なり名を遂げた後の彼は、故郷シュレジエン地方のアグネーテンドルフや、北ドイツの避暑地ヒデンゼー島、或いは北イタリアの保養地ラパロに引きこもり、懇意の仲間達に終始取り巻かれてはいたものの、自らの交遊をそれ以上広げようとはしなかったのである。P. ヒンデンブルクや W. ラーテナウや C. エーベルトといった政治家達との親交が厚かったのもハウプトマンの交際の特徴で、ワイマール共和国大統領候補の声もかかった彼らしいものだが、マンと比較すると、「20 世紀のゲーテ」としてドイツ文壇に君臨する彼には、本質的に「盟友」と形容し得る友人はいなかったのではないだろうか。(敢えて「対等の立場での」彼の親友を探せば、それは演劇評論家オットー・ブラームであろうが、彼は 1912 年に既に他界している。)ハウプトマンという作家は、自然主義的作品でデビューしたものの、当時(1887 年頃)の自然主義文学研究会“Durch!”や、文学者集団「フリードリヒスハーゲン・グループ(B. ヴィレや W. ベルシェやハルト兄弟等を中心にしてベルリン郊外フリードリヒスハーゲンに移住した作家集団)」

に対しては、決して中心的役割を担わず、客分として常に一定の距離を置いていた。若きハウプトマンも当時ベルリン郊外に移住したのだが、何故かフリードリヒスハーゲンよりも更にベルリンから一駅離れたエルクナーに居を構えたのである。更に自然主義から世紀転換期文学へ転身する一種のそつのなさや、ナチス政権に対する曖昧な態度を鑑みると、彼は現代作家の中でも、その真意を容易に表にあらわさぬ一人として、研究者の前に今尚立ちはだかっている。ハウプトマンを計りかねる似た様な苛立ちは、マンも抱いていたふしが見受けられる。ナチスが政権を奪取したことにより、プロシア芸術アカデミー文学部門の会員達が進退を迫られた際、マンは A. デーグリーン（共に脱退）にこの件に関し相談した手紙（1933年2月26日付）の中で、「ゲルハルト・ハウプトマンは、察するに態度を決めておらず、決める気もないだろうから、彼の意見は、今のところ問題ではない。」（ハウプトマンは結局アカデミーに残留する）と述べている⁹⁾。

次に考えられることは、両作家の生み出した文学の相違性である。劇作家として一家をなしたハウプトマンと、生来の小説家であったマンの文学の間には、当然の話であるが、本質的な差異が存在する。無論、両文学の差異を考究することが本稿の目的ではないし、このテーマについての本格的な分析に着手するとなると、それは大部な研究に発展することだろう。しかし、ともかく、誤解を恐れずに敢えて述べるならば、ハウプトマンとゾラやハウプトマンとイブセン、或いはマンと兄ハインリヒ、又はマンとヘッセなどの文学を比較する方が、遙かに取り組み易い研究であると思われる。この「と」という接続詞に関しては、他ならぬマン自身がその講演『ゲーテとトルストイ』の中で、「と」で結びつけられることによって生み出される作家間の本質的相関性の成立について、付言的に（或いは少し戯れ言めかして）言及しているが¹⁰⁾、ゲーテとトルストイならまだしも、ハウプトマンとマンの間に相関性が成立するなどとも思えない。もっとも、水と油ほど文学性の異なる作家の組み合わせなど、それこそ無数に考え得る訳なのだが、ハウプトマンとマンの場合で注目すべきことは、両者がしばしば類似したテーマを取り扱った作品を残している点なのである。そのひとつが、ゲーテであり、また芸術生活と市民生活の葛藤も、彼等の重要なテーマであった。この点については、それこそ、これから腰を据えて考察してゆかねばなるまいが、中期以降、シュレジエン神秘主義の影響を深く留めつつ、瞑想的で霊感的なインスピレーションに溢れる創作へと傾倒していったハウプトマンと、時には顕学的とまで指摘される程、思想的装飾を絢爛豪華に施した主知主義的な色合いの濃いマンの文学では、肌合いが余りにも違いすぎて、同じ土俵で論じるには少なからずためらいを禁じ得ないのも実感であろう。ゲーテひとつを取り上げてみても、マンの目は文学研究者としてゲーテへの畏敬の念を常ににじませながらも、その多面的な文学を時に冷徹に分析しているのに対し、ハウプトマンのゲーテ論は、この大文豪を、真善美のひとつの規範として自らの姿に対峙させながら、そのあるべき受容を模索した、言わば作家の信条告白とも解釈し得るのである。（ゲーテに限らず、マンの評論や講演録には、豊富な二次文献を渉猟した形跡が鮮やかだが、ハウプトマンについては、著名作家のそれを除いて、研究論文に接した痕跡というのは希薄である。）考察が深まらぬ内に、軽率な判断を下すことは避けたいが、両者のゲーテ解釈の相違点として、現今で筆者の注意を強く引く点がひとつある。それは晩年の両者についてなのだが、マンがゲーテに「生をいとおしむ人間の姿」を通して高次の民主主義を認めた一方¹¹⁾、ハウプトマンはゲーテの許に「ドイツ民族が団結し、平和を実現するべき」であると説いた¹²⁾。ナチス独裁下のドイツを追われ、再び母国に定住することはなかったマンと、ドイツ残留を選んだものの、その晩年を戦火に脅かされ続け、戦後は郷里シュレジエンがポーランドに割譲されるという辛酸を嘗めきったハウプトマンとの相違が、この解釈の背景を形

成しているものと考えられよう。

さて、両者の接点を探る上で最後に立ちふさがる障害は、また最大のものでもあるのだが、それは文献資料に関してである。ハウプトマン、マン共に、ドイツ文学者の中では多作家として群を抜いており、ハウプトマンのツェンテナー（生誕 100 周年記念）版全集 11 巻⁹⁾も、マンのフランクフルト版分冊式全集 20 巻¹⁰⁾も、大変な分量を有する個人全集となっている。（前者の 11 巻は“Sinndruck-Ausgabe [極上紙版] であるため巻数が後者の約半数となっているが、総頁数は 1 万 3 千～4 千頁で、両者共に大差はない。）しかし、両者の桁外れな執筆量は、戯曲や小説などの完成作品以外でその真価を發揮するのである。ハウプトマンは、詩や自伝や評論などを除いた、戯曲と小説の未完作品だけでも 98 に上り、74 を数える完成作品をはるかに凌ぐ。妙な言い方だが、彼はドイツ最大の「断片作家」のひとりでもあった訳である。また、マンについては全集の他に、1851 頁にもなるエッセイ集全 6 巻が刊行されている（全集との重複部分も存在する）。そして、作家達の交流を知る上で最も重要な資料となる日記と書簡がこれらに付け加わるのだが、両者はこのジャンルにおいても、類稀な量の文献を残しているのである。ハウプトマンの遺稿は、現在ベルリンの州立図書館に、プロシア文化財として保管されているが、その主体は、774 点に上るノートやファイルからなっている。この中で過半を占める日記類で整理・公刊されたものは、目下のところ『メモ付きカレンダー 1889—1891』を始めとして僅か 6 冊に過ぎない。現在は 1918 年まで刊行が進んだ状態だが、3・4 年に一冊出される進捗で、膨大な手記共々 1946 年までの日記が全て刊行されるには、この先どれほどの歳月を待たねばならないのか、皆目見当もつかないのが現状である。

ハウプトマンの情勢と比較すると、マンの遺稿はかなり整理が進んでいるといえよう。先に挙げたエッセイ集に加えて、1995 年には、待望久しかった日記全 10 巻（1918—1955）が完結した。マン日記は作家個人の生活・創作記録のみならず、激動する 20 世紀前半の欧米を、文化・社会批評も交えて克明に記録した、第一級の文学的・歴史的資料であり、その刊行は、1980 年代から 90 年代にかけてのドイツ文学出版界においても、最大のトピックのひとつに数えられるものであろう。ところが、完結成ったこの日記にも、致命的な欠陥があるのは周知のことである。即ち、年代を上述した通り、1918 年以前と、加えて 1922 年から 32 年までの 10 年間は、この日記からはすっぽりと抜け落ちてしまっているのである。これはマン自身、1945 年 5 月 21 日の日記に「以前から抱いていた決意を実行に移すべく古い日記を処分する」¹¹⁾と簡潔に記している様に、作家本人が当時のカリフォルニアの自宅で該当する過去の日記を焼却した結果である。ただ、1918 年から 1921 年の日記は、執筆中であった『ファウストゥス博士』の参照用にと、破棄を免れたのであった。マンに「決意」たらしめた要因は何であったのか。彼は 1896 年にも、それまで書き溜めた日記をいともあっさり焼き捨てているのだが¹²⁾、ギムナジウム時代から偏執的とさえいえる程事細かに日記をつけ、またそれを自らの創作ノートとしても活用していた彼が、日記というメディアをどの様に解釈していたのかは、今となっては推察する他はない。とにかく、途中 10 年間の欠落は、ハウプトマンとマンの関係を探る上において、非常な打撃である。何故なら、1922 年から 32 年までの 10 年間とは、ハウプトマン 60 回誕生記念祭から 70 回記念祭までの期間であり、彼の名声が国家的・歴史的なものへと飛躍し、マンがその飛躍の渦の中へと否応なく巻き込まれていく時期と符合するからである。そして、先に述べた「ペーペルコルン・スキヤンダル」は、24 年末に生じた出来事であり、顛末も含めてこの事件全体が日記の欠落期間に包含されてしまうのである。

日記資料そのものが未整理ではなく消失してしまっている以上、これからの研究は、この期間を如何に他の資料で補うかにかかってくるが、その点で大いに期待されるのが書簡資料である。ドイツ一流の「市民」であることを自負し、亡命の身にあつて自分の文学の反響に殊更敏感であつたマンは、ひとつの礼儀として、また外界と自らを繋ぐパイプとして、手紙のやり取りをこよなく愛した。彼が生涯に執筆した書簡は、3万通にまで達すると見積もられているが、その整理・公刊の進捗は思うに任せず、今まで出された10数冊の書簡集を合計してみても、5千通程度にしかなるまい。現在でさえ、最も引用される書簡集が、1965年発行のエリカ・マン編集による3冊本¹³⁾であるとは些か残念だが、87年に1万4千通の内容を要約・整理した『トーマス・マン書簡集』¹⁴⁾が出され、マン研究にとっては心強い助力となっている。一方、ハウプトマンの書簡に関しては、近年マンとの往復書簡が部分的に整理されたが¹⁵⁾、他には数名の作家・評論家との往復書簡集が公刊されている程度で、整理がそれほど進んだとはいえない。彼が一体どれほどの手紙を出したかさえ、定かではないのが現状である。ベルリン州立図書館の彼の遺品には、6万通もの彼の宛の書簡が含まれていることから推しても、彼が相当数の手紙を物したことに疑いはないだろう。ただ、ブラムやフィッシャーとの往復書簡から明らかになることは、彼が、マンの様に、手紙の中でひとつのテーマについて掘り下げた議論を展開することは滅多になかったという事実である。いや、そもそも日記でもそうなのだが、ハウプトマンには縦横無尽な帰納・演繹による自説の論理的展開などは無縁であつた。彼の表現は、直観的な言説により構成されていたのであつて、作品では、この表現法が時に深遠な文学性を生み出す源となつたのだが、日記・書簡も含めた日常的な言動では、しばしば「支離滅裂」な印象さえ伴つたのである。従つて、「記録」として評価した際のハウプトマンの日記・書簡は、マンのそれに比較すると、やや妥当性に欠けるとするものが、筆者の見解である。

かつて丸山匠氏が、「マンとハウプトマンの関係を調べてみたことがあるが、その時は、信憑性のあるハウプトマン側の資料が乏しく、途中で放棄してしまつた」旨の発言をされたことがあつた¹⁶⁾。マン側の資料はその当時から大分充実してきているものの、ハウプトマン側の資料不足は、中々これといった改善を見せはしない。つまり、両者の相手に関する発言としては、マン側の発言がますます明らかになってきている訳であり、資料的には、黙して語らぬハウプトマンに対し、マンが一方向的に述べたてる構図となっているのである。或いは、ハウプトマンは本当にマンに対して多くを語らず、また記しもしなかつたのかも知れないが、その数少ない言動の端々からは、マンに対する彼の特別な感情が見え隠れする。マンにしても、「民衆の王、(ワイマール)共和国の王」¹⁷⁾とハウプトマンを持ち上げ、慇懃な饒舌をいくら労したところで、老作家に対する複雑な思いを韜晦しきれものではない。つまり、両者の間に横たわる、えも言われぬ微妙なしこりは、ペーペルコルン事件のみでは説明し尽くせない、著名作家としての彼等の関係内でこそ発生し得た、一種の「瘤」と捉えられるのではないだろうか。彼等の複線的な関係を究明する試みには、資料的障害と、当代一流のミスティカーであるハウプトマン及びイロニカーのマンの真意を分析するという困難さが付きまとうが、作家間関係の新たな一形態を提示する意味でも、意義ある研究といえるだろう。

註

1) Stirk, S.D., "Gerhart Hauptmann and Mynheer Peeperkorn" in: German life & letters. New series,

ハウプトマンとマンの関係を探る

- 1952, p. 162-175.
- 2) Brescius, Hans v., "Neues von Mynheer Peeperkorn" in: Neue deutsche Hefte, Jg. 21, H. 1, 1974, S. 34-51.
 - 3) Tschörtner, Heinz-Dieter, Gerhart Hauptmann und Thomas Mann. Versuch einer Darstellung ihrer Beziehungen, in: Die Nation 10 (1960), H. 9, S. 715-728.
 - 4) クラウス・マン, 『転回点—マン家の人々』(小栗浩他訳), 晶文社 1986, 106頁。
 - 5) Die Briefe Thomas Manns Bd. 1, bearb. u. hrsg. v. H. Bürgin/O. Mayer, Frankfurt a.M. 1976, S. 689.
 - 6) Th.M., Leiden und Größe der Meister, Frankfurt a.M. 1982, S. 32-33.
 - 7) Th.M., Goethe und die Demokratie, in: ibid. S. 336-363.
 - 8) G.H., Goethe und die Volksseele, in: Sämtliche Werke CA Bd. 6, 1965, S. 736-739.
 - 9) ハウプトマン全集は, 60歳と80歳の誕生日を記念して, それぞれ1922年と42年に12巻及び17巻揃えでフィッシャー社から刊行されたが, 1962年から74年にかけてプロピレーエン社から出されたツェンテナー版は, 質・量共に旧版を遙かに凌ぐ。このセットの完成度には定評があり, それは, 刊行より四半世紀が経過した現在も尚, 絶版とはなっていない点に窺えよう。
 - 10) マンの全集としては, 1955年に80歳記念版として出されたアウフバウ版が, ドイツ国内版としては最初である。その後, 12巻揃えである記念版 Thomas Mann, Gesammelte Werke in 12 Bändenが, 1960年にフィッシャー社より出され(後年別巻補遺がつき, 13巻揃えとなる), 本文中で挙げた分冊版全集よりも, 概ね高い権威を有しているのだが, 既に絶版となっている。この状況を受けて, 本年(1998)から, 決定版ともいえる批評版(現時点で全巻数は未定。)の刊行が開始される。
 - 11) Th.M., Tagebücher 1944-1946, Frankfurt a.M. 1986, S. 208.
 - 12) 1896年2月17日付けの級友O. グラウトフに宛てたマンの手紙に, 全ての日記を焼却したとある。/Anm. 14, S. 15.
 - 13) この書簡集は, 約1400通を収録する。/Th.M., Briefe, hrsg.v. Erika Mann, 3 Bände, Frankfurt a.M. 1961-65.
 - 14) Die Briefe Thomas Manns, bearb. u. hrsg. unter Mitarb. v. G. Heine/Y. Schmidlin v. H. Bürgin u. H.-O. Mayer, 5 Bände, Frankfurt a.M. 1976-1987.
 - 15) Der Briefwechsel zwischen Thomas Mann und Gerhart Hauptmann, Teil I: Einführung, Briefe 1912-1924/Teil II: Briefe 1924-1935, Dokumentation und Verzeichnisse, hrsg.v. H. Weyssling/C. Bernini, in: Thomas Mann Jahrbuch 6 (1993), S. 245-282/7 (1994), S. 256-291.
 - 16) 丸山 匠, 『マンとハウプトマン』(『トーマス・マン全集 月報(8)』, 3~4頁), 新潮社 1972。
 - 17) ハウプトマン第60回誕生日記念講演『ドイツ共和国について』より。/Th.M., Von Deutscher Republik, Frankfurt a.M. 1984, S. 119.